

第4回キャンパスおだわら運営委員会 会議概要

日 時	平成26年10月22日（水）午後2時から4時まで		
場 所	小田原市役所 議会全員協議会室		
委員長	齊藤 ゆか	出席	学識経験者
副委員長	瀬戸 充	出席	生涯学習の向上に資する活動を行う者
委員	金澤 久美子	欠席	学識経験者
	左京 泰明	欠席	
	有賀 かおる	出席	生涯学習の向上に資する活動を行う者
	安藤 恵	出席	
	岩屋 泰彦	欠席	
	与那嶺 信重	出席	
	石井 悦子	出席	公募市民
	永田 圭志	出席	
	立花 ますみ	欠席	教育委員会が必要と認める者
事務局	(文化部) 諸星部長、安藤副部長 (生涯学習課) 友部課長、大木担当副課長、村田係長、 佐久間主任、田中主事		
キャンパスおだわら事務局	奥村理事長、高塩理事		
キャンパスおだわら人材バンク実行委員会	太田委員長、早野副委員長		
傍聴者	無し		

※委員は選出区分別五十音順(委員長・副委員長除く)

1. 開会

安藤副部長より、次第及び卓上配布資料について報告。

2. 議題

(1)開設講座について

キャンパスおだわら事務局（以下、「C事務局」）

資料1に基づいて説明させていただく。

説明に先立ち、資料に一部誤りがあったため、訂正をお願いしたい。

8番「郷土史から見た日本の歴史」は5回の連続講座だが、5回目の講座内容が欠落していたので、「発展する江戸と小田原」を追加いただきたい。

ジャンル別に分類すると、音楽・演劇が6講座、文学・歴史が16講座、美術・手工芸が8講座、スポーツ・アウトドアが24講座、福祉活動・社会活動が14講座、その他趣味・娯楽が28講座である。なお、【お】と付いている講座は小田原ならではの講座であり、18講座、【子】と付いている講座は子供も参加できる講座であり、30講座である。

これらの講座は、キャンパスおだわら事務局で仮認定した講座であり、もう一度委員の皆様にご確認いただきたい。

委員長 対象講座は96講座と多くあるが、ただ今の説明に対して、何か質問や意見はあるか。

有賀委員 番号61「遊びサポーター養成講座『遊びの実践イベント』」は会場が富士見小学校と矢作小学校とあるが、学校開催は今まで無かったと思う。学校で実施する理由と、この2校を会場として選んだ理由がわかれば教えていただきたい。

大木副課長 こちらは主催が行政（青少年課）である。詳しくは分からないが、青少年課の中で調整した結果、この2校が選ばれていると思われる。

有賀委員 体育館で実施するのか。

大木副課長 把握していない。

委員長 講座名に「シニア」と付くものがあるが、シニアとは何歳からを対象としているのか。学会でもシニアとは何歳からをいうのか議論になっている。

友部課長 シニアが何歳からかというのは決まっているものではなく、おそらくそれぞれの団体がシニアという響きの中で判断しているものと思われる。例えば、

番号43「シニア向けニュースポーツ教室」の対象は55歳以上となっている。主催は小田原市体育協会であるので、この団体では55歳以上をシニアと捉えているのではないか。番号32「シニア健康づくりタイム」では県立西湘地区体育センターが主催しているが、こちらは60歳以上が対象であり、それぞれの団体で考えていると思われる。

委員長 何歳からシニアと呼ぶのか、国際的にはどうかなど、かなり議論になっている。

C事務局 NPO法人小田原市生涯学習推進員の会（以下、「NPO」）では明確な基準は無いが、65歳以上をシニアとして捉えている。一線で働いていたかたがリタイアされた後に参加していただくことを想定している。

委員長 老人、お年寄り、高齢者、シニアなど色々な呼び方がある。最近は老人会という加入しないので別の名前にする動きなどもある。高齢者という国際的に65歳以上という基準があるが、シニアは定められたものがないので、聞かせていただいた。それでは、仮認定の講座については、認定ということによろしいか。

（異議なし）

委員長 それでは、資料1の講座については認定とする。

(2) キャンパスおだわらのあり方について

友部課長 それでは、議題の「(2) キャンパスおだわらのあり方について」の「①市民ニーズの把握について」説明する。

資料2-1をご覧いただきたい。

これは、キャンパスおだわらにおける市民ニーズの把握について、前回の運営委員会での提出案と、それに対する主なご意見を記すとともに、いただいたご意見を踏まえ再度行政が検討した改善案と、それを実施に移す今後の動きを表にしたものである。

まず、講座参加者のニーズ把握については、前回、共通項目を定めたアンケートを作成するという案を提出させていただいたが、アンケートの内容について、全体のニーズ把握に必要な項目から個々の講座のブラッシュアップ等に必要な項目まで、幅広くご意見をいただいた。

これらを踏まえた改善案として、まず、共通のアンケート項目について、その目的がキャンパスおだわら全体のニーズ把握に活用するためにあるという視点に立ち、精査することとした。

その上で、講師の教え方、運営スタッフの対応など、個々の講座のブラッシュアップ等に必要な項目については、各講座において共通アンケート項目に適宜追加し活用していただく、また、受講の動機や満足度などの具体的な内容については、講座の中でインタビュー形式で尋ねるなど、アンケート以外でも取得する工夫をすることで対応していくこととした。

次に、資料2-2をご覧ください。

これは、ただ今説明した共通のアンケート項目を見直した案である。前回は素案という形での提示であったが、今回はそれぞれのアンケート項目を目的に応じて、①属性、②動機、③満足度、④ニーズに分類させていただいた。この内、①、②、④の項目については、キャンパスおだわらで把握する講座から共通的に情報収集し、属性情報と組み合わせて統計、分析することで、市民ニーズに対応した講座の企画等に活用するものとした。③の項目については、キャンパスおだわらの目指す姿の1つである「市民ニーズ（分野・対象・開催場所）に対応した講座が提供されている」を計るための指標の1つ「講座満足度」をキャンパスおだわら全体から収集することに活用する。

資料2-1にお戻りいただきたい。

今後の動きとしては、このアンケートについて、来年度からの本実施を計画しており、本日、アンケートの共通項目が定まったら、来月から、行政講座等で試行的に実施し検証し、その上で、来年、平成27年1月から、広くキャンパスおだわら認定講座で利用していただくために、講座を実施している各団体に対し、依頼してまいりたいと考えている。

続いて、講座不参加者のニーズの把握については、前回、講座以外の場で、講座に参加しない理由等を聞くアンケートを実施してまいりたいとの案を提示させていただいたが、同様の内容が世論調査で把握できるとのご意見をいただいた。

そこで、最近の世論調査を確認したところ、平成24年7月に内閣府で実施された調査が、想定していたアンケート内容をほぼ満たすものとなっていたため、講座不参加者へ広くアンケートを実施することはせず、この世論調査の結果を活用することとした。参考資料1がその世論調査の概要であるので、ご覧ください。

表紙にあるとおり、この調査は、全国の20歳以上の日本国籍を有するもの3,000人を対象に、調査員による個別面接聴取により行われた調査で、有効回収数1,956人、回収率65.2%となっている。

3頁をお開きいただきたい。設問(2)「この1年間の生涯学習の実施状況」になるが、「生涯学習をしたことがない」と答えたかたは、42.5%となっている。

続いて、12頁をお開きいただきたい。これは、設問(2)で、この1年間で「生涯学習をしたことがない」と答えた人に対して、その理由を聞いたも

のである。

回答結果の上位2項目としては、「仕事が忙しくて時間が無い」が43.4%、「きっかけがつかめない」が20.9%、となっている。

続いて、参考資料2をご覧ください。

これは、この世論調査について、参考資料1の概要に掲載されていない、回答者の「年代別」及び「男女別・年代別」の内訳と、先ほどの資料の3頁の設問「(2) この1年間の生涯学習の実施状況」で「生涯学習をしたことがない」と回答した人、12頁の設問「(11) 生涯学習をしていない理由」で「きっかけがつかめない」、「必要な情報がなかなか入手できない」と回答した人の内訳を「年代別」及び「男女別・年代別」にグラフにしたものである。

資料2-1にお戻りいただきたい。

下から2段目の「改善案」であるが、今回、講座不参加者のニーズの把握については、この調査結果を参考にして、「きっかけがつかめない」「必要な情報がなかなか手に入らない」を選択した人は、潜在的な参加意欲や時間はあるものの、情報が入手できないために生涯学習に参加できないのではないかと仮定し、この層をターゲットにした情報発信方法や学習相談の活用について検討してまいりたいと考えたものである。

本日は、資料2-1の市民ニーズ把握の改善案について、こうした方向性でよろしいかご議論いただきたい。

説明は以上である。

委員長 講座参加者と不参加者がいて、講座参加者に対しては、共通のアンケート項目を設定して情報収集、ニーズ把握をしようということである。前回の会議では、内容について色々意見があり、ボリュームとしてはA4で1枚程度が妥当であるとの話があった。3分ほど時間を使い、言い回しなど、プレ調査という形で、自分が回答しやすいかどうか確認していただきたい。

(委員確認)

委員長 このアンケートを実施するのは、講座が終わった後のタイミングか。

大木副課長 そのとおりである。

委員長 2～3分で回答できたと思う。文字の大きさなど、様々な年代のかたが回答すると思うので、率直に意見をいただきたい。

安藤委員 属性の部分で、「あなたのお住まいについて、該当するものを選び、○で囲んでください。」という設問に対する選択肢が、「1. 市内」、「2. 県内」とな

っている。市内、市外のほうが分かりやすいのではないか。
また、動機の部分で、「この講座を何でお知りになりましたか。該当するものを選び、○で囲んでください。」の設問に対する選択肢の中で、「5. チラシ・ポスター（入手場所： ）」の入手場所記載欄が少し狭く感じた。
加えて、同設問に対する選択肢の中に、「知人に誘われて」という項目があるので、その後の設問「この講座に参加された動機は何ですか。該当するものを選び、○で囲んでください。」に対する選択肢の中にも友人に誘われてなんとなく来たという項目があっても良いと感じた。「その他」に書けば良いのかもしれないが、項目があると良いと思った。

石井委員 この時間では書ききれなかった。年配のかたには少し字が小さいと感じた。このようなアンケートは色々な所で渡され、最後に書くことになるが、講演会など、途中で抜ける場合もあり、その際にはアンケートを書かないこともある。冒頭に、本日はアンケート記入をお願いしたい旨をアナウンスすると、書きやすいのではと思う。

委員長 配布するタイミングと、促すタイミング、回収方法に関わる工夫についてということになる。例えば12時に終わる講座で5分前にアンケートを渡されても、早く帰りたいので適当にアンケートを書かれてしまうこともある。

与那嶺委員 量はあまり多いと書く意欲が無くなってしまうので、この程度で良い。満足度の項目で「この講座を受講して感じたことは何ですか、該当するものを選び、○で囲んでください。」という設問があるが、選択肢の内容を見ると、講座自体の感想ではないので、感じたことよりも、受講した成果という形にしたらどうか。

委員長 感想と捉えるのか、成果と捉えるかということである。アウトプットとアウトカムの成果をどう捉えるか、どこを評価して捉えるのかということと近い。「感じたこと」とした趣旨は何かあるか。

大木副課長 確かにこの設問は与那嶺委員が言われるとおり、成果を聞く内容であるが、答えるかたが気楽に答えられるようにこの表現を使わせていただいた。

与那嶺委員 あなた（受講者）にとってということであると理解した。

副委員長 迷うことなく最後まで記入することができた。字の大きさも問題ない。

有賀委員 9月に連続2回の行政講座を受けたが、最後にアンケートを書いた。量的に

はA4で1枚程度が限界だと感じた。記述式はあまり多くない方が良い。項目については、動機の最後の設問で、何を期待して受講したかを聞き、次の満足度の設問で期待どおりだったかと聞いている。この繋がりは重要であると思った。

委員長 キャンパスおだわら事務局としてはどうか。アンケートを配布するケースが増えると思うが。

人材バンク実行委員長（以下、「実行委員長」）

個々の講座は事前申込みが多い。その場合、属性に関わる部分は申込みの際に事前に聞いている。受講後のアンケートで聞く必要はなく、項目を少なくすべきではないか。

委員長 今の意見については、全体としてどのような属性のかたが講座に参加しているかについては事前に把握できるが、アンケートを書かれた人と属性とが繋がらなくなってしまうので、やはりアンケートの中でも属性を聞く必要があると思う。

C事務局 来年1月以降に運用ということだが、内容としては、NPOが自主講座で使用しているアンケートとほぼ同じであり、特に問題はない。NPOの自主講座ではこの次にもう一度この講座に参加したいかどうかも聞いており、これに対しては明快な応答があるので、その項目があっても良いと思う。アンケートはほとんどの講座で実施されていると思うが、共通項目を決めての対応により、統計情報を取り、市民ニーズを集約するということが目的となるので、今後主催者のかたに共通項目のアンケートを提供していくということが我々の動きになる。共通項目の多くは、個々で実施しているアンケートでも取られているはずなので、主催者側もそれほど苦痛ではないと思われる。アンケートを書かれるタイミングは人それぞれだが、量としてはA4で1枚程度が適当であると感じる。NPOの自主講座では、このほかにメールアドレスなどの情報提供をお願いする項目もある。共通項目はA4表1枚を提供し、裏面に各団体が適宜項目を追加して使用する形は合理的と思う。

委員長 項目の内容は良いと思うが、属性の項目はすっと入っていくかたと、抵抗があるかたの両方がいるので最後にしたほうが良い。最初の属性の部分が抜けると動機から始まり、少し違和感があるので、満足度から始めて、動機、ニーズ、属性の順にすると良いのではないかと。自分が講座を開催する時には、対象が60歳代や70歳代のかたが多い。資料を作る時には、フォントの大きさを12ポイントに設定している。可能であれば設問の項目については1

2ポイントにしたほうが見やすいと思われる。

有賀委員 ニーズの項目で、「あなたが出席しやすい時間帯はいつですか。該当するものを選び、○で囲んでください。」という設問に対する選択肢が、土曜日から始まっている。平日から始めるのが自然ではないか。

委員長 何か理由があるのか。

大木副課長 ない。

委員長 一般的には平日からではないか。この部分は修正したほうが良い。

安藤委員 私が使用するアンケートも満足度から始めて、属性はその後聞くこととしている。欄外のコメントは本実施の際にも入るのか。

大木副課長 本実施の際には入らない。

安藤委員 それならば、その部分を使ってもう少し行間を空けたほうが見やすい。

委員長 講師の満足度を問う項目が無いが、あえて聞いていないのか。

大木副課長 あえて聞いていない。課長の説明にもあったが、全体のニーズ把握が一番重要な部分であり、講師のかたが個々に評価を聞きたいといった部分については、必要に応じて個別に追加するなどして対応することを想定しているので、あえて外している。

委員長 意図的であるということで了解した。

与那嶺委員 期待どおりであったかという設問に、講師の評価も含まれるのではないか。

委員長 社会教育の担当者などは、講師の評価を聞いて、来年も頼むかどうかを決めたりすることもあるが、今回は満足度よりもニーズに重点を置いているということで、必要に応じて適宜追加する形でお願いしたい。ニーズの項目で不足している項目はあるか。

石井委員 1番下の感想や意見のところだが、「自由にお書きください」という書き方だと、書きづらいこともある。何か適当な項目があれば、いくつか挙げて選択させるほうが答えやすい。

- 委員長 幅をとるのではないか。
- 有賀委員 小田原市民が主な対象と思われるので、家からの距離が近いなど、開催場所の設問は案のとおりあったほうが良い。
- 副委員長 時間と場所について聞いているので、このとおりで良いと思う。
- 与那嶺委員 内閣府のアンケートで、きっかけがつかめないために生涯学習に参加できないという回答があったが、時間が理由であることも多いと思われる。参加したかったが時間が合わなかったという声は良く聞く。時間や場所を聞くことは重要である。今後どのような講座が必要かといった内容を自由記述欄で吸い上げられればなお良い。
- 委員長 学生に企画書を書かせる際には、5W2Hを意識させている。5W2Hとは「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「どうする」「なぜ」「いくらで」であるが、その視点で考えると内容や方法の部分があったら良いと感じた。満足度の部分でいうと、シニア向けの講座を実施する際に、インタビュー形式でなぜこの講座に参加したのかを聞くことがあるが、新しいことを学んでみたいという回答も多い。そう考えると、新しい学びや気づきがあったという選択肢は有効である。ここに無い項目であるとすれば、ここで新しい友人ができたであるとか、自分のやるべきことを見つけたなど、新しい関係性をつくりたいという動機に対応した満足度の項目があっても良い。個人としての学びではない、関係性（ソーシャルキャピタル）の項目があると良いと思った。
- 与那嶺委員 世論調査できっかけがつかめないと回答している人の理由は、何か掴んでいるか。
- 大木副課長 その件は講座不参加者に対しての話になるので、この後に触れていきたいと考えている。
- 友部課長 意見をいただきたい部分が一か所ある。アンケートの順番を変えた方が良いのではという意見の中で、最初に満足度の部分を持ってきて、次に動機の部分を持ってくると、今は動機に関する設問の最後に、「この講座に何を期待して受講されましたか。」と聞いており、次の満足度の設問で「この講座の内容は期待どおりでしたか。」という流れになっている。順番を変えてしまうと、時系列が逆になってしまうが、この点はいかがか。

- 委員長 属性の部分を最後にするということが趣旨であったので、時系列の問題があるのであれば、動機から聞いても良いと思われる。
- 有賀委員 先程も話をさせていただいたが、何を期待して受講したかという設問と、講座の内容は期待どおりだったかという設問の繋がりは大それたと思うので、動機が先で満足度が後の方が良い。
- 委員長 それでは、動機の設問から始めて、満足度を聞くという流れとし、講座を何で知ったかという部分は適切な場所に配置するというところでよろしいか。
- 永田委員 講座を何で知ったかという設問から始めても問題ないと思われる。
- 安藤委員 何で知ったかから始まって、動機があり、満足度があるという流れのほうが良い。
- 委員長 違和感が無ければ、動機、満足度、ニーズ、属性の順にするということが良いか。
- 副委員長 私は、何も考えずに書ける属性が一番の方がやりやすい。書くのに抵抗があるとは感じなかった。
- 石井委員 女性の方が抵抗があるのかもしれない。
- 委員長 世論の流れからすると、属性は最後の方が良いと思われる。
それでは、講座受講者へのアンケートの記載順は、動機、満足度、ニーズ、属性の順とする。
- 友部課長 ニーズの項目で「あなたが出席しやすい時間帯はいつですか。」という項目の選択肢に、「いつでも」があっても良いと感じたが、いかがか。
- 委員長 確かに、「いつでも」という項目があっても良いと思われる。仕事をしているかたは土曜日や日曜日に○を付ける人が多いと思うが、退職したかたなどで、いつでも良いというかたもいる。
- 友部課長 講座不参加者に対しての今後の対応は、案のとおりでよろしいか。
- 委員長 生涯学習は2割事業といわれ、2割程度の市民しか参加していないのが現状

である。また、リピーターが多いことも、良い方向で捉える場合と、講座荒らしという悪い方向で捉える場合がある。不参加者をどう取り込むかということは政策的な議題となっている。さしあたって、2割の参加者に対しては先程のアンケートでニーズを把握するという形で進めていくこととした。講座不参加者に対しての調査方法や情報収集は難しい面があり、世論調査を活用するという提案がなされているがいかがか。次年度事業になると思うが。

石井委員 不参加の理由として、参加したいが時間が無い人と、講座があること自体を知らない人がいると思われる。私もキャンパスおだわら運営委員会に参加して初めて情報誌等を目にした。もう少し情報誌などの存在を広められれば、講座参加者が増えるのではないか。情報発信等の中で検討で良いと思う。

与那嶺委員 きっかけがつかめないのは、情報が入手できないからという仮定はそのとおりであると思う。私も先日南足柄市の情報誌を見る機会があり、参加したいと感じる講座があった。そう考えると、情報の発信は重要である。「情報が入手できないためと仮定」とあるので、それで良いと思う。

有賀委員 先日講座に参加して意外だったのは、一人で色々な講座に参加している人が多いことである。色々な講座に参加している人とまったく講座に参加しない人で2極化しているようである。講座に参加している人は生き生きとしている。参加してもらうためのきっかけづくりは重要である。

委員長 きっかけの把握も重要ということである。

副委員長 私は朝日新聞をとっているが、集金の際にキャンパスおだわら情報誌を置いていく。相当な家庭に届いていると思うが、どれほど見てもらえているかが重要である。回覧物はなかなか見てもらえないのが常である。講座に参加した人が不参加の人に講座の存在を伝えてもらうほうが、効果が大きいと思われる。自治会でも、回覧を回しても参加してもらえないので、一本釣りの電話などで勧誘すると参加してもらえることもある。参加者をいかに活用して不参加者を参加の方向に傾かせるかが重要である。

永田委員 情報があるということをどう発信するかが一番難しい。これから情報発信について話を思うと思うが、例えばインターネットのホームページがあったとしても、ホームページがあることを知らなければ意味が無く、また検索しなければそこに辿り着けない。その前段階の状態をどのように整えるかが重要である。

委員長 まとめると、講座不参加者に対しての方向性はこれで良いということになる。もう一つは、どうしたら参加してもらえるのかということについて意見があった。その中で、参加者が不参加者を誘うということについては、例えば講座参加者へのアンケートの最後に、この講座に誰かを誘おうと思いますかといった設問を追加することで、誰かを誘うという意識を持ってもらえる可能性がある。市民ニーズの把握について、講座参加者と講座不参加者への方向性はこれで良いということに決定した。

続いて、議題の「②情報発信について」行政から説明願いたい。

友部課長 それでは、情報発信について説明する。

資料3-1をご覧ください。

上段の「情報発信の方向性」については、前回説明させていただいたものであるが、目指す姿を実現するための今後の方向性と具体的手法例をまとめたものである。

下段の表は、「必要な情報が必要な所に届いている」という目指す姿の観点からの関係性を表したものであるが、今回はこちらの表の3段目に、それぞれ該当する提供媒体を追加させていただいた。「()」で記しているのは、新たに取り入れるべきと考える媒体になる。

続いて、資料3-2をご覧ください。

これは、前回の運営委員会でお示した現在キャンパスおだわらで学習情報を提供している媒体の種類と、それぞれの内容が記載された一覧表に、情報発信の方向性、利用目的と提供情報の関係性等を踏まえ、具体的な改善の方向性をまとめたものである。

一覧表のうち、下線が引かれている個所が、改善案として現状から変更する部分、網かけ部分については、新たな提供媒体の案として追加するものである。また、「備考」欄については、左側の各列の内容には当てはまらない方向性や改善案を書いている。

まず、全体の変更点として、3列目の「主な対象(利用目的)」について、資料3-1にある利用目的の欄の表現に統一させていただいた。

次に、個別に説明させていただくが、キャンパスおだわら情報誌では、「学習意欲を喚起する」という目的を追加し、それに対応するため、情報の内容に、生涯学習分野で活躍する「人物紹介」や「受講者の声」を追加した。配布先については、現在の配布先に加え、講座参加者に対して最新号を配布するなどし、リピーターを増やす方策を検討する。「備考」欄であるが、興味のない人も目を引き、手に取ってもらえるようなインパクトのある表紙づくりも検討すべきと考えている。

次に、自分時間手帖であるが、「媒体名」に「おだわら市民ガイド」と記している。本日卓上にお配りさせていただいたが、おだわら市民ガイドは、表の

欄外に※印でも書いているが、行政情報をはじめ、生活情報や、施設案内などを掲載した情報誌で、民間企業と小田原市（広報広聴課が所管となるが）が協働で発行しているものである。イベント情報や施設情報など、自分時間手帖と重複する内容もあるので、自分時間手帖をこちらへ統合する形で進めてまいりたいと考えており、現在調整しているところである。統合することによるメリットとしては、表にもあるとおり、「発行部数」が現在、自分時間手帖の年5千部であるのに対し、おだわら市民ガイドは年2万部を発行していること、「配布先」では、小田原市への転入者全員にも配布をしているため、転入前に生涯学習活動をしていて、小田原市でも活動したいと考えている人にも速やかに情報を提供することが可能となることなどがある。今後は、おだわら市民ガイドの特性を生かした情報内容の精査や、転入、子どもの独立など、ライフイベントの変化に伴うニーズへの対応についても検討してまいりたいと考えている。

3点目の「キャンパスおだわらホームページ」については、「備考」の欄になるが、前回の運営委員会でいただいたご意見を踏まえ、講座情報の見やすさを改善するとともに、講座情報のページから直接講座の申し込みができるような仕組みができないか検討する。

次の「メールマガジン（新規）」「Facebook 等（新規）」については、新規で媒体を追加している項目になる。まずメールマガジンであるが、「生涯学習情報を特定のターゲットに対してリアルタイムに配信」することを目的とし、学びたい人、講座に参加したことのある人を対象に講座情報やイベント情報を発信する。発信先については、「キャンパスおだわらホームページ上から登録した人」及び「講座に参加した人の内、メールマガジンの受信を希望した人」としている。この発信にあたっては、ジャンル別の登録を可能とし、必要な情報だけを届けられる仕組みを検討する。

次にFacebook等のいわゆるSNSサービスであるが、メールマガジンと同様に、「生涯学習情報を特定のターゲットに対してリアルタイムに配信」とともに、SNSサービスの特性である「情報の拡散」を目的とするものである。「主な対象」については、現在の利用者の傾向から、主に若年層が対象となると思われるが、SNSの特性を生かし、学習のきっかけがつかめない人に情報を届ける手段にできるのではないかと考えている。情報の内容としては、講座情報、イベント情報に加え、既に行なったイベントのレポートを提供することで、学習意欲の喚起につなげる。その他の活用方法として、「他の学習を通じた活動を実施している団体のFacebook等との積極的な連携」や、「管理者だけでなく、講座企画者などが自由に投稿できる仕組みの検討」、「学習相談的役割を持たせる」、「イベントレポート以外にも、学習のきっかけがつかめない人を取り込むような方策」を検討してまいりたいと思う。

最後に「PLANETかながわ」であるが、こちらは神奈川県が所管するシ

システムを、県や県内の市町村が利用している形であるので、小田原市だけの考えで内容等を変更することはできないが、フォントや色合いに統一感を持たせる、分野選択におけるジャンルの統一など、まずはページの見やすさ、使い勝手の向上を県に要望してまいりたいと考えている。

なお、今回提示した改善案は、あくまで方向性の提示と考えていただければと思う。方向性が固まったら、実施するために必要な作業や費用を洗い出し、できるところから順次進めてまいりたいと思う。

本日は、情報発信の方向性について、示した案がこれで良いか引き続き協議いただくとともに、提供媒体の改善案について、ユーザーの視点からのご意見もいただければと思うので、よろしく願います。

委員長 自分時間手帖から何ページぐらいが市民ガイドに移るのか。

大木副課長 ページ数についてはこれから調整になるが、自分時間手帖の情報のうち、サークル情報、出前講座、キャンパス講師の情報が市民ガイドにプラスされる形になる。施設情報については市民ガイドでも充実しているので、一部生涯学習特有の情報については調整が必要だが、基本的には市民ガイドの情報を活用していく形になる。イベント情報についても市民ガイドにも盛り込まれているのでそちらに統合することになる。

委員長 団体・サークル情報は、生涯学習団体に限定されたものか、それとも市民団体などの情報も入っているのか。

大木副課長 全体の調整はしていないが、自分時間手帖の中にボランティア情報が入っているので、この中である程度統一性は取れていると考えている。

委員長 一般的に言われているのが、市民団体と生涯学習団体は折り合えずにそれぞれがお互いを把握していないことがある。市民から見ればどちらも団体であるので、お互いを把握している必要がある。
提供媒体の中で委員の皆様が届いている認識があるのはどれか。挙手願いたい。

(キャンパスおだわら情報誌	・・・全員)
(おだわら市民ガイド	・・・4人)
(キャンパスおだわらホームページ	・・・2人)
(PLANE Tかながわ	・・・3人)
(広報おだわら	・・・全員)
(メールマガジンなどを良く読んでいる人	・・・4人)

(Facebook を使われている人

・・・3人)

キャンパスおだわらの情報誌と広報おだわらは委員の中では受け取っているという認識であるようだ。

現状はこのような状況であるが、いかがか。

永田委員 今やはり提供媒体として、Facebook や Twitter、YouTube などが強いのではないか。

委員長 今小田原市で Facebook を活用している課はほかにあるのか。

大木副課長 広報広聴課で全庁的な Facebook を作成している。

委員長 その中に入るイメージか。

大木副課長 方法についてはこれからの協議になる。

委員長 それでは、まずは方向性を問う形になる。自分時間手帖を市民ガイドに集約する方向性についてはいかがか。

石井委員 良いと思う。2冊あるよりは、1冊のほうが使いやすい。手に取りやすいのは、市民ガイドであると思われる。小田原市の情報はこれを見ればだいたい分かるとなれば各媒体をバラバラに保管しなくて済む。

永田委員 統合されることでのデメリットはあるか。

大木副課長 自分時間手帖は一目で生涯学習の冊子だと分かるが、市民ガイドについては今後協議することになるが、基本的には市民ガイドというスタイルなので、この中に生涯学習情報が入っているということが表に出にくくなるかもしれないことがデメリットである。しかし、それ以上に年2万部が発行され、全転入者に配布されることで、きっかけづくりにもなる。以前からキャンパスおだわら事務局とも検討してきたが、市民ガイドの発行元であるポスト広告からも前向きな話があったため、ここで切り替えていくべきと考え、提案させていただいた。

石井委員 もし分からないことがあった場合に、聞く場所が分かればそこに問い合わせられるので、いろいろな冊子があるより良いと思う。

- C事務局 自分時間手帖と市民ガイドは、性格は違うものの、自分時間手帖は年5千部、一方市民ガイドは年2万部を発行している。公共施設等を見ていただくと、市民ガイドはどこにも置かれているが、自分時間手帖はどこに置いてあるかわからない状態である。以前岩屋委員からも、誰も見たことがないのご意見をいただいております、この際皆様の目の届くところに提供すべきとの考えから、色々課題もあるが期待しているところである。情報提供のきっかけの一つの手段になればと考えている。
- 副委員長 自分時間手帖は、何かの会に入りたい、何かを習いたいという人には大変便利な冊子である。市民ガイドに統合されると、今までどおり使えるのか心配である。自分時間手帖という言葉はかなり市民に浸透しているのではと思う。
- 石井委員 サークル等に参加している人は、1年に1回グループに対して自分時間手帖を渡されるので知っているが、一般市民はほとんど知らない。逆に、市民ガイドは転入者に必ず渡しているということなので、その方が広がりやすいと感じる。
- 有賀委員 自分時間手帖に慣れ親しんでいる人もおり、市民ガイドに盛り込まれたことを周知する必要がある。先日も、スクールボランティアコーディネータの集まりの際に、自分時間手帖を渡して活用を促したところであったので、統合されるのであれば、しっかりと伝えなければならないと感じた。
- 委員長 市民ガイドに統合されることで、今よりも団体やサークルの情報内容が少なくなることが予想される。
- 石井委員 キャンパスおだわら事務局もあるので、冊子に詳細な情報が載っていないくても、問い合わせ先がしっかりと明記されていて、そこで明確な答えがもらえれば問題ない。そこに辿り着く方法がしっかりと書かれていれば良い。
- 委員長 私がサークルや団体を探すとすると、インターネットで検索する。
- 石井委員 インターネット上にしっかりと情報が載っていれば、若い人はそれで情報が入手できる。しかし、高齢のかたはインターネットを使わない人も多く、そのかたたちにとっては必要と思われる。
- 委員長 出前講座の情報は、キャンパスおだわら情報誌やホームページで提供できる。予算のこともあると思うので、集約する中で新たな情報を発信し、さらに発展させていただくということによろしいか。

(異議なし)

- 委員長 それでは新規媒体の部分についてはいかがか。
- 安藤委員 メールマガジンについては、受講した人にとっては次の講座の情報が入ってくるので受講しやすくなる。そのメールに一言、友人もお誘いくださいという文言があれば、自分の興味のあることなので、友人を誘いやすくなるのではないか。また、母親などは横の繋がりもあるので、そのような発展性も見込まれる。メールマガジンについては賛成である。
- 永田委員 メールマガジンについてだが、講座やイベントがあります、やりますという情報など様々だと思うが、キャンパスおだわらのメールマガジンは、小田原市のメールマガジンとは別のところで管理するのか。
- 大木副課長 小田原市のメールマガジンは市の管理である。こちらはキャンパスおだわらのメールマガジンであるので、もし小田原市のメールマガジンを使うとなると市を介さなければならなくなるので、別のところでの展開になる。
- 永田委員 小田原市のメールマガジンは登録時に色々なジャンルをチェックすることで選べるようになっている。あの中にキャンパスおだわらが入っていると、登録する人もいるのではと思う。
- 安藤委員 今の小田原市のホームページはレイアウトも変わってしまい、探したいところに行きつかないという声を良く聞く。メールマガジンにも辿り着けない人が多いようである。今回は新たなところでメールマガジンを展開することになるのか。
- C事務局 現在その方向で検討している。メールマガジンやFacebook は直接的な効果が期待できるが、実情として、現在もインターネット上に様々な情報を提供しているが、パソコンでアクセスする人が限定的である。携帯やスマートフォンへの展開が必要と思っている。受ける側には有効な手段だが、メールマガジンの登録画面にアクセスし、登録してもらえかどうか最大のポイントである。
- 委員長 内容と発信方法ということも非常に重要になる。しつこい内容にならないように、情報をどう集約するかなど、大事な要素である。相模原市の協働推進事業で、ある団体が市と協働で子育て情報を発信している。メールマガジン

の登録については子どもの健診のタイミングを活用してPRしている。タイムリーな情報が必要だが、公的な情報でもあるので行政のチェックが入り、タイムラグが生じるという課題もある。Facebook はシブヤ大学の左京委員も活用している。講座の情報や開催した講座のレポートなどが発信されている。私も登録しているので、頻繁に情報が入ってくる。今日は出席されていないが、岩屋委員は当初から、ホームページ上から講座の申し込みができれば良いと言いつけている。

永田委員 ホームページ上で、講座の定員があと何名か分かると良いのではないかと。

委員長 シブヤ大学ではその方法を取っている。

永田委員 定員の残りが分かると、急がなければと思って申し込まれる効果が期待できる。

委員長 メールマガジンや Facebook は実施するとなると、誰が発信するかが大事になるが、どういう想定が。

大木副課長 これからの調整になるが、まずはキャンパスおだわら事務局と調整していく。

石井委員 キャンパスおだわら事務局とは、どういう形で参加しているのか。

大木副課長 今はキャンパスおだわら事務局の業務をNPOに業務委託している。業務については、NPOのかたが携わっている。

石井委員 会員とはどのようなかたなのか。もしメールマガジンや Facebook などの事業をやりますとなった場合、それに参加したいと思ったらNPOの会員になれば良いのか。

大木副課長 今の段階では、NPOに一手に委託しているので、一般のかたがそこに携わりたい場合は会員になる必要がある。しかし、キャンパスおだわらは様々な事業があるので、業務委託している以外の事業が発生した場合は、手伝いたいというかたはどなたでも参加できる。

委員長 キャンパスおだわらのホームページを見ると、内容が盛りだくさんで、議事録などもすべて載っている。私のような研究者にとってはありがたいが、別の見方をすると、余計な情報が多く、どれが重要か分からない。ちょっと学びたい、活動したいという人にとっては導入部分としては難しく仕上がって

しまっている。

行政では、シティープロモーションなどという。今回は学習分野に限定されるが、どういう見せかたをすると受け取りやすいか、見せ方の研究の専門家もいるほどで、情報提供というのは政策的にも重要な部分になる。写真の出しかたや表紙の出しかたなど、見せかたの流行りもある。

ホームページを変えるごとにお金もかかってしまうので、そのあたりの折り合いの問題もある。

東海大学のカワイ先生はその分野の専門家で、よく講座も開催している。

実行委員長 情報誌についてだが、人材バンクで企画する講座は、従来は全世帯に配布される広報おだわらに掲載されていたが、配布が限定的なキャンパスおだわら情報誌に掲載を移行してから、応募が激減してしまった。そこで、個別にチラシを作成し自治会回覧することで盛り返した経緯がある。生涯学習情報を本当に市民に伝達していくには今のままでいいのかということを考える必要がある。今はチラシを自治会や学校の生徒一人一人に配るなどして対応している。

委員長 公共施設などは、一定部数配架されてそのままということが多い。一人一人に配布するには新聞の折り込みが一番有効な手段か。

実行委員長 一番有効な手段は、市の広報紙と同じ範囲へ配布することであるが、費用がかかってしまう。FMおだわらやケーブルテレビの活用など、ほかにも方法はある。

安藤委員 広報おだわらも、自治会に入っていない人や、新聞をとっていない人には届かないという実情がある。学校についても、小学生の親が自治会に入らない人が増えている。学校でチラシを配っても家に持ち帰らない子どもが多い。お知らせをメール配信にしようという話もあったと思うが。

諸星部長 教育委員会全体でそのようになったという話は聞いていない。不審者情報など一斉に配信する必要があるものはメールマガジンの仕組みの中で実施している。学校で個別に対応している可能性はある。

委員長 緊急性の問題もあり、生涯学習は違うと思う。小田原市の自治会の加入率はどれくらいか。

諸星部長 約8割である。

委員長 全国的にみると高い方であると思う。私が住んでいるところは45%である。今、安藤委員が言われた内容は全国的な課題であり、すぐに解決できない問題でもある。

学習情報の提供については、自分時間手帖を市民ガイドに統合するということが良いか。また、メールマガジンと Facebook の新規の提案もこのとおりで良いか。

(異議なし)

委員長 その方向を具体的にどうするか、また、キャンパスおだわら情報誌の配布先などについての課題も残っているが、ここでまず承認を得たということにする。

以上で本日の議題は終了する。

3. その他

- ・ 次回の運営委員会は平成26年12月19日(金)午後開催予定。近日中に時間を確定し案内を発送する。

以上